



MY ACTION

Vol. 13

同じ地球に住む人たちのために

女優 菊川 怜

KIKUKAWA REI



© OSCAR PROMOTION

PROFILE

1978年埼玉県出身。東京大学工学部建築学科卒業。主演映画「めおん」が来春公開予定。2005年1月、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のスペシャルサポーターに就任。

2005年から国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のスペシャルサポーターをさせていただいています。それまで、ニュースなどを通じて難民の方たちの映像を目にするのはあったのですが、それが一体どんなことなのか、身近に感じていませんでした。

最初に訪れたのは、ケニアのダダブ難民キャンプ。初めてアフリカの大地に足を踏み入れた時の衝撃は、今でも鮮明に覚えています。人生で体験したことのない暑さ、そして、目の前に広がる大自然。でも私がいるのは、確かに同じ地球にある国なんだって。不思議な感じでした。

首都ナイロビから小型飛行機で1時間行ったところに、ソマリア難民など約27万人の人々が暮らすキャンプがありました。そこは、小さな家に大家族が肩を寄せ合って生活していて、十分な食料もないような状況。水も配給制

で、バケツの水を一滴も無駄にすまいと、大切に使用している姿が印象的でした。

キャンプの子どもたちに「ふるさと」をテーマに絵を描いてもらったのですが、銃を持った兵士や血を流している人など、悲しい絵が多くて驚きました。こんなに小さな子が、こんなにも深い心の傷を負っているのだと…。何とも言えない気持ちになりました。

学校でもボロボロになった教科書を何人かでシェアしていたり、病院でも床で寝ている人がいたり、頭の中で想像していた光景が目の前で起こっているんです。「私にできることは何だろう」と思いながら、そこでははっきりした答えを見つけることができませんでした。

彼らはこのキャンプで生まれ育ち、いつ自分たちの国に帰れるのかも分からない。でも将来の夢を聞くと、「お

医者さん」「スポーツ選手」「政治家」など、キラキラした笑顔で答えてくれました。こんな状況の中でも、明日への“希望”へ向かって、力強く生きているんです。

私が見てきた途上国と平和な時間が流れる日本。どちらも現実なんです。これは遠い国で起こっていることじゃない。一つの地球の上に住む私自身の問題なんです。水、食料、医療、難民、環境など、取り組むべき課題はたくさんあります。私もUNHCRのスペシャルサポーターとして、少しでも多くの人に、この現実を伝えていくお手伝いができればと思っています。

私たちにできるのは、まずは“知る”ということではないでしょうか。そして、どんなに小さくてもいいから、何か一歩踏み出してもらえたらうれしいです。それは、私たち自身の未来のためにもなると思うから。